

小説同人誌評 46

大連と イスラエル国 細見和之

ひどい猛暑がようやく終わったと思ったら、秋の深まりどころか、冬の気配である。日本は春と秋のない、夏と冬の二季節に移行しつつあるかのようだ。この間、イスラエルとハマスが停戦に合意し、イスラエル軍のガザからの撤退、ハマスによる人質の解放が実現した。とはいえ、ふたたびイスラエルによる攻撃が再開されたりして、行方は予断を許さない。それだけでなくパレスチナ人の死者はすでに六万七〇〇〇人を超え、ガザは廃墟と化しているのである。

イスラエルという国家を理不尽と考えるひとは日本にも多数いるだろう。しかし、それが戦前、日本が強引に作り上げた満洲国と極似していることを指摘する声はすくない。当時の日本は、満洲民族、朝鮮民族、漢民族などが暮らしていた土地を奪い、多数の難民を生み出し、周囲から敵視され続けた。国際連盟からも承認されず、日本は国際連盟から脱

退することになったのである。その満洲国の玄関口ともなったのが、日露戦争の「勝利」によってロシアの租借地から日本の租借地となった典型的な植民地都市、大連だった。

『異土』第24号掲載の、秋吉好「大連幻像」は、作者と同一年で大連に生まれた「保雄」の視点で、保雄の父母のこと、日本の敗戦前後、日本への引揚げまでを、四百字詰め換算一七七枚で描いた大作（枚数は目次による。なお、以下、「四百字詰め換算で」は省略）。

保雄は一九四四年の生まれである。だから、保雄自身には大連の当時の記憶は皆無である。残された母親の文章、家族の写真などから保雄は当時の父母の姿を想像する。また、ツアー旅行で保雄が大連を訪れたときの記憶も組み込まれている。歴史的な考証も優れていて、父母の動向に当時の日本と世界の状況が重ねられるだけでなく、煎餅屋をしていた父母に関わる土地の奥深い歴史にまで筆はおよぼされている。

さらに、『アカシアの大連』で芥川賞を受賞する清岡卓行、『二十歳のエチュード』で知られる原口統三など、大連で暮らしていた時期をもつ文学者に視線が向けられている。清岡の大連に対する眼差し、自殺した原口の清岡の捉え方、その双方に保雄が批判的であることも興味深い。

あくまで小説なので、いくらかはフィクシ

ョンが入っているにしろ、作者自身が一九四四年に大連で生まれている。そこからしても「保雄」とは作者そのものにほかならないだろう。この作品は、多くの優れた歴史小説を書いてきた作者が長い間あたたためてきたテーマであるに違いない。

一方、『飢餓窓』第53号掲載の、渡利真「山麓（なんざんろく）の給水塔」は、日本の敗戦、ソ連の侵攻にいたる直前までの、やはり大連での生活を、女学校を卒業したばかりの少女の視点で描いた九〇枚弱の作品。

「昭和十九年の春」、女学校を卒業したばかりの十七歳の「美鶴」は、母に言われた用事で、大連から旅順まで列車で向かう。行く先は、旅順工科大学の教員宅、兄が世話になった恩師のもとである。どうやら母親はその教員に結婚相手を紹介してもらうつもりで、美鶴本人を送り出したようなのだ。

昭和一九年春といえは、日本の戦況はすでに絶望的になりはじめていたが、大連はまだいたって平穏な雰囲気である。とはいえ、兄は大学の卒業前に学徒動員されていて、美鶴の自宅の庭にも防空壕が掘られる。掘るのは日本人の組長に連れられてきた「満人」である。やがて防空演習も重ねられてゆく…。

タイトルにある「給水塔」は、大連で美鶴が方向を確かめる際の目印であるとともに、大連での日本人の生活を支えているシンボル

でもある。給水塔はどっしりとしているように、じつは危ういのだ。

それにしても、美鶴は大連を生きいきと動きまわっている。先の秋吉の作品が父母の営んでいた煎餅屋の場所を確かめられないままなのと較べると、ここで描かれているのは当時の現在時そのものの大連である。作者はどこからこれだけのリアリティを得ることができたのか、その背景も知りたくなる。

この二篇、私の受けとめでは、先に記したようなイスラエルという国家への問い直しと繋がっている気がするのだが、それぞれの作者にとってはどうだったのだろうか。

同誌掲載の、須藤薫子「オマエガコロシタ」は、ひとりのろくでもない男の生と死をめぐって、それを取り巻くひとびとの視点をつぎつぎと変えてゆきながら、一二〇枚あまりで描いた実験的な作品。

中心人物は「前賀悟郎太」という名前の男。いきなり、頭部の右側が欠損した遺体として登場する。そこから悟郎太の生涯が妻の「リノ」、前賀夫妻のアパートの階上に暮らしていた「安西」、悟郎太の死に立ち会う准看護師の「浅井」、前賀夫婦の娘「ソノ子」などの視点ないし絡みで描かれてゆく。

タイトルの「オマエガコロシタ」は、悟郎太がそのつど相手にうわ言のように呟く言葉だが、「オ」と「シ」を除けば前賀悟郎太の名

前のカタカナ表記そのものに近い。悟郎太は自分の名前を繰り返していたのか、相手に怖ろしい呪いの言葉を吐いていたのか、真相は闇の中である。

『カム』第23号掲載の、山本一男「ころがる石」は、風俗業をしていた若い女性を、二人の若者が救い出す模様をテンポよく描いた、一五枚あまりの作品。面白さという点では、今回読んだなかで随一だった。

主人公の「僕」（吉田）は大学生生活五年目を迎える四回生。バイトに追われる生活で、卒業の見通しも立たないまま、バイトを止めて気分転換に気ままな旅に出ることを思い立つ。時代は一九八二年で、「青春18きっぷ」の発売が始まった時期なのだ。バンド仲間で、大学院生の「井上」が意外なことに一緒に旅に出るという。あとで分かるのだが、井上の父は大手の会社の技術職員だったが、自死してしまっていたのである。

「僕」のバイト先は深夜喫茶で、風俗に關わっているらしい女性たちがいるアパートに食事を届けるのも「僕」の仕事である。その女性たちのなかで「ヴィーナス」と呼ばれている女性のことを「僕」はひそかに気にしている。すると、ある深夜、そのアパートに食事を届けたとき、不意にヴィーナスから「逃がしてほしい」と声をかけられ、彼女と二人でそのアパートから逃げ出すことになる。ヴ

イーナスらを働かしていた男は、麻薬にも手を出していたのだった。

ここからの追いつ追われつの、まさしく活劇的な展開は見事。いささか向こう見ずな「僕」とつねに冷静沈着な井上の対比が巧みだし、なによりもヴィーナスの姿が凝刺としている。

『文の鳥』第7号掲載の、竹田多恵子「明るく、農村」は、奈良県の古い農村にひとりの若者がやって来て馴染もうとする姿を、町内の自治会長の妻「私」の視点で描いた、九〇枚弱の作品。

広報を町内に配っているとき「私」は、ある家から不意にジャズの音楽が流れているのを耳にする。その二階からは見たことのない三十代半ばの若者が顔を出して、親しげにあいさつする。狭い町内にすでにその若者の噂は広がっていて、「私」は「内藤雅也」という名前を知ることになる。内藤は商社会社で海外勤務を続けていたのだが、その会社のあり方に疑問を感じて退社して、いまは農業を生活手段にしようとしているのだった。

「私」の夫の「武彦」は、そういう内藤をいくらか訝しく思っているのだが、トラクターの運転や田植えの仕方を内藤に教えることになる。武彦は坐骨神経痛を患っていて、手助けが欲しいことも事実なのだ。内藤は武彦らの手づくりの市場「ファーマーズハウス」のホームページを作成するなど、町に馴染ん

でゆくように思えるが、無農薬や有機農法について口にする内藤と武彦のあいだには、埋められない距離も存在している。

武彦をはじめ町内の男たちが妻と嫁の主体性を認めようとしないうのに対して、内藤は、義母の介護のために看護師の仕事をやめるかどうか迷っている女性の相談に乗っていて、その義父を激怒させてしまう。その結果、内藤はいったん町を離れてゆく……。

いまささしく私の近辺でも日常化している出来事だが、時代設定は平成から令和に移るところ。いまから二五年前の町の風景である作者の筆は冴えていて、会話も地の文も歯切れがよくてじつに読みやすい。

『白鴉』第35号掲載の、大新健一郎「やすらぎカメラ」も同様に、農村への移住者を扱っているが、こちらは移住した者の視点で描いた九三枚（目次による）の作品。

「高畠拓馬」は娘「梨香」の小児喘息の治療も兼ねて、空気のよい地方への移住を決意したのだった。拓馬は会社が奨励していた在宅勤務を選び、財務担当から社史編纂の仕事に変わっていた。ウェブデザイナーの仕事をしている妻もリモート勤務である。

拓馬は自治会の会合で町に「やすらぎカメラ」が設置されたことを知る。拓馬よりも一〇年前に移住してきた「森脇」が導入を進めてきた、要するに監視カメラである。それが

町の要所にすでに設置されていて、拓馬にもそのカメラの画像をチェックする当番がまわってくるという。町には外国人が多く働いている工場があつて、その寮にもカメラが設置されている。

梨香が喘息の発作を起こして学校を休んだあと、インフルエンザが拡がり小学校が学級閉鎖になる。すると、工場の外国人と梨香が親しくしている様子をやすらぎカメラが捉えていて、それが問題視されることになる。まるで、梨香と外国人の接触によってインフルエンザの菌が蔓延したかのように。その問題の根源には、町の有力者である「村木」とそのライバルのような「桜井」の確執が背景にあったとされている、地方の持つ閉鎖性が浮き彫りになっている。

一方、拓馬は会社がりモート勤務を推奨することでも、それに応じた者をリストラしようとしていて、それに気づいた者がリストラしように安住できる場所ではない。最後、村木と桜井が和解するカタチになっていて、ともあれ地方で生きることの可能性が示唆されている。

『moon』第23号掲載の、杜館悦志「マイ掃苔記」は、どのような死を選ぶべきかをめぐる一八〇枚近くの力作。

作品の冒頭、主人公の「東海克勇（とうかいかつお）」は癌が体の各所に転移していて、余命三ヶ月の診断を下される。とびきり高価

な先進医療か緩和治療かの選択肢のなか、致し方なく克勇は緩和治療を選択する。そこからは、妻の「千舟」とともに死後にどのような埋葬が可能かを追究してゆく。克勇は無宗教での葬儀を希望して、それには千舟も賛成なのだが、戒名を得られないまま墓に収まることのできるかという問題がある。さらに、火葬か土葬かという選択肢のなか、火葬のあつけなさに対する否定的な二人だが、土葬の可能性が現在の日本ではもう絶無であることを知る。

親鸞が希望していた遺体を川に流して魚のえさにするというありかたが二人にとって理想なのだが、やはり遺体放置もしくは遺体損壊罪にしかならない。これでは千舟が犯罪者になってしまう。

作品の後半、インドに暮らしていた息子「勇魚」が帰国して、ガンジス川に流される遺体などについて詳しく語る。そして、最終的には妻の千舟に内緒で、勇魚が生きている克勇を船から海に投じることになる……。

構想力と筆力、ともにゆたかな新たな書き手の登場かと思っていれば、巻末の「同人紹介」という欄を読むと、杜館悦志という作者名は以前から読んできた森田哲司の別名と分かる。こういう作品はこの筆名で、ということだろうか。

『AMAZON』第53号掲載の、吉留敦子「冥府界限」は、死後の墓の問題をユニーク

な視点で描いた、三〇枚弱の好短編。

冒頭、「私」は自動ドアの前に立っている。すると会社の同僚の「藤田」がやって来る。

「私」はひとりで早く来すぎたことを悔やんでいる。どうやらその自動ドアはこの世とあの世の境界で、「私」も藤田も死んであの世にいるのだ。しかも、「私」のほうが藤田よりまさきにそこに来っていたのである。

藤田はその自動ドアのある部屋から元の世界の様子が見られるという。窓の外を見ていた藤田は、自分の納骨が済まされるのを確認する。「私」も同様に自分の骨壺が「鈴木家代々の墓」に納められるのを確かめる。しかし、問題は妻たちが自分自身の骨をどうするつもりか、である。

窓の向こうで、「私」の妻が藤田の妻と電話で話している。結婚して姓を夫のものに変えるほかなかった悔しさ、相手の家に嫁に行くという感覚、江戸時代のような家制度……。夫の生前には言い切れなかった不満を、二人は交わし合っている。そこからすると、どちらも夫と同じ墓に収まるつもりはないようだ。

夫の死後に妻たちが本心を吐露し合い、それをあの世から夫たちが見ているという設定が秀逸。

『せる』第129号掲載の、塚田源秀「ハゼの音」は、生豆から焙煎したコーヒーを出す喫茶店を経営している夫婦を描いた約四〇枚の

短篇。読後の印象は深く、とても四〇枚とは思えない奥行が感じられる。

作品の冒頭は妻の「未央」の視点で、夫の「晴夫」が豆の焙煎をしている様子が描かれている。未央のほうが焙煎は得意でずっと未央の担当だったのだが、いまは癌治療を受けている身体で、晴夫の焙煎を静かに見守っているのだった。

作品の半ばからは、晴夫の視点に変わる。とうとう未央が亡くなってしまったのだ。失意の晴夫はいったん店を閉じるが、四十九日明けから店を再開するために、焙煎の練習をはじめ。焙煎機と生豆を販売している「丸山社長」、パン屋の「石窯さん」(本名「樋口」)、それに、店の常雇客の一人だった「丹部くん」に試飲してもらう。いずれも未央のコーヒーを愛飲していた、いわばコーヒーの友人である。晴夫の焙煎したコーヒーを彼らがどう判定してくれるか……。

タイトルは生豆を焙煎する最後の段階で豆がパチパチと爆ぜる音のこと。これに繊細に耳を傾けることが焙煎のコツなのだ。

『V.I.K.I.N.G』第896号掲載の、今野和茂「生家」は、六〇枚あまりの短篇だが、この作品も枚数を超える奥行を感じさせる。

作品は主人公の「大場」が東村山の生家に二ヶ月ぶりに帰ってくるところで始まる。大場は千葉に暮らしているのだが、小学四年に

なる娘の「加奈」を母「幹江」に預けている。一年半前、妻の「晶子」が書き置きを残して、不倫相手の男とともに出奔してしまったのだ。しかも、その年のはじめには、「曾根」という女性から大場のもとに電話があつて、すぐに離婚届にサインをして提出してほしいという晶子の願いを聞かされていた。

建築設計士の仕事をしていて冷静な大場だが、晶子をめぐる状況、加奈の気持ち、どちらもよく把握しているのは、母親の幹江である。晶子が離婚を急いでいるのは、妊娠しているからだろうと幹江は鋭く推測する。東村山の家を売り払って大きなマンションに移ろうという大場の計画は、東村山の家への加奈の愛着によって頓挫する。東村山の家はすでに加奈の生家にもなっていたのだ。

父と母の離婚を知らされて泣きじゃくる加奈に「加奈はええ子やなあ、ママのことを嫌いにならんやええや」と語りかける幹江の言葉が胸に残る。

『雑記離子』第30号掲載の、谷口俊哉「バオバブの樹の下で」は、セネガルで交通事故死した息子の足跡を父親が訪ねてゆく一四〇枚の力作。

冒頭、「私」はセネガルの大使館員の車で案内されて、息子「翔太」の墓標に佇む。そして、大使館員から翔太の所持品に麻薬があつたことも知らされる。「私」は翔太の暮らして

いたアパートを訪ね、そこで翔太のルームメイトだった巨大な黒人女性と出会う。「私」はその姿から彼女を秘かに「アケボノ」と呼ぶ。相撲取りの曙をイメージして、である。

翔太はセネガルの奥地、バサリ地方を訪れて、その様子をユーチューブで動画配信していた。翔太の遺品にはその地方の手書きの地図もあった。「私」はそのセネガルの奥地になんとしても向かいたいと願う。すると、アケボノと一緒にしてくれると言う。彼女はその地方の出身者だったのだ。

ここから、アケボノと「私」の凄まじい旅が始まる。陽気で怪しげな運転手の登場、川を渡る際に現われる危険なワニとカバ。セネガルの奥地を目指す二人の旅の描写は、まさしく作者の独壇場である。

二人は最終的に翔太が現地の知人と開設した施設「キボウ寮」にたどり着く。内戦や親の麻薬などで孤児になった子どもたちの世話をする場所だった。翔太が事故死した際に所持していた麻薬は、その地域に流通している麻薬を役所に提示して麻薬の撲滅を訴えるためのものだったのだ。

翔太の死はただの交通事故だったのか、それとも麻薬組織による暗殺だったのか、その点は不明のままでが（おそらく後者の設定だろう）、よくぞこれだけの物語を、リアリティをもって描けるものだと感心してしまった。

『組香』第10号掲載の、鵜川澄弘「ユア・ビューティフル・ネーム」は、近未来の東京都を舞台とした六四枚くらいの作品。

冒頭、「私」は東京都から東京都外の地方を歩いている。あぜ道で老婆と名前をめぐって不思議なやり取りが交わされる。そこから場面は「私」が働いている介護施設となる。東京都にあるその施設では、名前ではなくコードネームで互いを呼び合うことになっているのだった。

そもそも東京都では、「プライバシー・ファースト・パーティー」(PFP)という政党が議会の第一党となつて、新しい条例が施行されている。プライバシー保護のため、三人以上がいいる場面では個人の氏名を口にするのが禁じられているのだ。その施設の所長は「公人」として個人名が知られている。企業の役員、国会議員、スポーツ選手なども「公人」である。そして、二人で合っているときには互いの名前を打ち明けるのが許されているため、そういう機会は「告白タイム」と呼ばれているのだった。なんと息苦しい社会だ。

冒頭で「私」が向かっているのは、東京外にある「旅の宿」である。そこでは、宿泊者同士が語り合うミーティングが毎晩開かれていくという。PFPに対抗する勢力が育ちつつあるということだろう。

『半月 すおうおおしま』第10号+5号掲載

の、瀬戸みゆう「それぞれのテリトリ」は、野良猫との「わたし」の悪戦苦闘を描いた、六〇枚の作品。

庭や自宅にやって来る子猫たちにどういう態度で臨むか。エサをやつてはならないのは分かっている。しかし、とくに痩せ細っている子猫が気になる。案の定、その子猫がある日、雨樋のすぐ近くで雨に打たれている。「わたし」はせめて雨のからまない郵便ポストの下にちり取りに乗せて移動させる。しかし、その先に雨水を受けとめる溝があるのが気になる。すると、十数分後、予想どおりその子猫は溝に落ちて死んでいた。そのあたりの描写は丁寧かつ着実で、とても印象深い。

同誌は瀬戸みゆうの個人誌。同時に掲載されている、瀬戸みゆう「その日曜日のこと」は、ブラジルのマウナス市で暮らしている一家の姿を描いた、四八枚ほどの作品。

こちらでもきばきと描かれている。以前から作者はマウナス市の日本人学校を舞台にした作品を描いてきた。今回は、不意にゴーストタウンと化したマウナスの中心部で、強盗に遭う話である。

同誌に掲載されている「冥界への入り口三篇」もそれぞれによくできた掌篇。個人誌でありながらこの中身の濃さはすばらしい。一冊の雑誌として考えた場合、今回はこれがいちばん充実していた印象である。